

# いじめ体験と基本的対人態度の関連<sup>1)</sup>

碓井真史

Relationship between “Ijimme” (Bullying)  
and Basic Interpersonal Attitude

Mafumi Usui

## 問 題

「いじめ」は、いつの時代にも起ったことだろう。「いじめ」が「広辞苑」に載ったのは近年のことであるといった指摘もあるが、「弱い者いじめ」といった言葉は古くから使われていることであろうし、強者が弱者を攻撃することは、ほとんどの社会場面で見られることだろう。海外においても、いじめは高い関心をもたれている (Olweus, 1993)。

それでは、以前からあったいじめと、現代におけるいじめが同種のものであるかという点、疑問が生じる。一般に、現代のいじめは、以前のいじめと比較して、日常化、一般化、集団化、陰湿化、偽装化、遊び化していると言われている。滝川 (1995) は、現代的ないじめの特徴として、以前のような特定の「いじめっ子」がいなくなり、子ども集団が、誰が中心なのかはあいまいなまま、いつの間にかいじめを発生させていると述べている。また、いじめ—いじめられの関係が流動化し、特定の弱者だけがいじめられるのではなく、誰もがいじめの対象になりうるとしている。さらに、いじめと遊びの境界が不明瞭になっていると指摘している。

文部省の統計によれば、1994年度のいじめ件数は、約57,000件であり、ピーク時の1985年度の5分の1になっている。ただし、この資料は、「学校としてその(いじめの)事実を確認されているもの」として報告され集計されたものである。表面には現れないいじめが多数あることは、容易に想像できる。いわゆる「暗数」問題である。また、直接のいじめ—いじめられだけではなく、「傍観者」としていじめに関っている者も含めれば、かなりの生徒達がいじめに関連した体験を持っていると考えられる。森田ら (1986) は、いじめには被害者、加害者のほかに、「観衆」や「傍観者」が存在していると述べている。

統計的ないじめの件数自体は減少する中で、1993年には、いじめによる殺人事件「マット圧死事件」が起こった。これは「いじめ」ではなく、犯罪であるとの指摘もあるが、マスコミはいじめ事件として報道し、世間はいじめに大きな関心を持ったと言えよう。さらに1994年には、いじ

1) 本研究は、筆者の指導により、落合勝也氏が収集した研究データをもとにおこなわれた(1993年度 道都大学 社会福祉学部 社会福祉学科 卒業論文)。

めの内容を詳細に書いた遺書を残した自殺があり、これに続き多くの「いじめ自殺事件」がセンセーショナルに報道された。校内暴力に続き多数のいじめが報告された1985年当時も、マスコミ報道によって校内暴力やいじめが増加しているとの現場からの声もあったが(能重,1985)、現在も同様の問題が危惧される。

マスコミの報道姿勢の問題はあるものの、このような「いじめ殺人」や、「いじめ自殺」などの出来事は、社会全体ではむしろ非暴力化が進む中で、学校におけるいじめが深刻さを増していることを伺わせる。また、これらの膨大な報道によって、実際以上にいじめに対して敏感になっていることも考えられる。

深谷(1996)は、直接的ないじめ被害だけではなく、「いじめられ不安」が多くの人たちに広がっていると述べている。彼女の調査によれば、小学校入学前の幼稚園児を持つ母親の約7割が、いじめ被害への不安を示し、全く心配していないとの回答は、0であった。

いじめに関する統計の信頼性が低いことはすでに述べたが、文部省は、いじめを「1) 自分より弱いものに対して一方的に、2) 身体的、心理的な攻撃を継続的に加え、3) 相手が深刻な苦痛を感じているもの」と定義している。しかし、被害者がいじめであると認知すればそれは「いじめ」であるとも考えられる。客観的な統計などでは、明確な操作的定義が必要だろうが、いじめ関連体験の心理的な影響を考える際には、主観的にいじめられたと感じていたかどうかが重要だろう。笠井(1998)も、ある行為を主観的に「いじめ」だと認識することの重要性を述べている。

滝(1996)によれば、いじめに関する研究では、「いじめっ子」「いじめられっ子」の性格をいじめの原因と考えるような研究は近年批判され、たとえば加害者にある種の性格特性はあるものの、いじめの原因としてはむしろ学校環境との不適応を考えるべきだとされている。さらに彼は、従来、いじめの発生要因の中心とみなされがちであった被害者の性格は、集団内の人間関係の中でいじめの口実を与えやすいという点から言えば、発生と無関係ではないが、問題はむしろ加害者の特性にあり、その加害者の特性も、性格の欠陥というよりは学校生活への不適応の結果と捉える方が適切であると述べている。

一方、松尾(1996)は、臨床的な経験から、「大学生の自分史をみると、加害者であれ、被害者であれ、その両方であれ、いじめの体験が記されていることがしばしばである」と述べ、いじめと人格の成長に深い関係があることを主張している。いじめにかかわる当事者の性格特性がいじめの主要原因ではないとしても、いじめ体験が性格形成に関わっていることは予想できる。

また香取(1998)も、いじめ関連体験の長期的影響について言及している。Olweus(1993)は、いじめの加害者が、その後になって犯罪を犯す割合が高いことを示している。光竹(1997)は、いじめの被害者の中には心的外傷後ストレス障害(PTSD)に似た症状を表す者がいると述べている。

油布(1996)は、いじめの問題は、いじめっ子、いじめられっ子のどちらに非があるといった問題ではなく、子どもたちの対人的な相互作用能力、関係性能力全般の低下の問題だと指摘している。子供たちの対人能力の低下がいわれ始めてからすでに久しい。

そこで、本研究では、大学生を対象に、今までで最も印象的だったいじめに関する体験について質問し、あわせて、基本的な対人態度を調べ、両者の関連を調べることにする。

## 方 法

### 1. 調査対象

大学生50名(男性37名、女性13名)を対象に調査を行った。

## 2. 調査項目

調査項目には、いじめに関する調査項目と、一般的な対人行動に関する項目がある。

### A いじめに関する質問項目

- (1) いじめ関連項目として、「いじめた」「いじめられた」「傍観していた」「止めに入った」「周囲にいじめはなかった」をあげ、この中から、これまでで最も印象的だった項目を一つ選択させた。次にそのいじめが起きた時期を質問した。
- (2) いじめの理由、止めずに傍観していた理由、いじめを止めた理由を質問し、自由記述方式で回答させた。また、いじめ終結の理由（きっかけ）を質問した。いじめ終結の理由に関しては、いくつかの選択肢を設けた。選択肢として次の項目を提示した。「クラスや学校が変わった（クラス替え、転校、卒業）」「いじめっ子の態度が変わった」「いじめられっ子の態度が変わった」「周りの態度が変わった」「誰かが介入した」「その他」。

### B 一般的対人態度に関する質問項目

西平（1964）が作成した「基本的対人態度インベントリー」を使用した。これは、たとえば「私は人に対して暖かく接するのが好きだ」「私は人がいないと寂しいので、いつの人と一緒にいたい」など21の質問項目からなり、人間の行動を次ぎの3つの側面に分類している。まず第一は、「人に向かう働き」（T）、第二は、「人に反発する働き」（A）、第三は、「人から離れる働き」（I）である。さらに、各々の対人態度を「肯定的で望ましい」（g）、あるいは、「否定的で好ましくない」（p）に分類し、Tg（親和）、Tp（依存）、Ag（指導）、Ap（敵対）、Ig（独創）Ip（孤立）と分類する。そして、全体のg/pの値で、全般的な行動特性の望ましさを測定するものである。

## 3. 手続き

1993年12月、授業時間を利用し、質問紙を実施した。

## 結 果

### 1 いじめに関連した体験

「いじめられていた」と回答した者が最も多く、18名（36%）であった。次に、「傍観していた」が14名（28%）、「いじめていた」が6名（12%）、「止めに入った」が5名（10%）であった。これらを合計すると、86%の者が、いじめに関連する体験をしていることになる。「いじめはなかった」との回答は、7名（14%）であった。

そのもっとも印象的ないじめが発生した時期は、小学校時代22件（44%）、中学校時代21件（42%）、高校時代7件（14%）であった。

### 2 行動の理由

#### ・いじめた理由

いじめの理由としては、「相手の性格が悪い」「具体的な理由はないが、気に入くない」「容姿が悪い」「行動がのろい」など、多様な回答が見られた。

・傍観していた理由

傍観していたと回答した14名は、その理由として、「関心がなかった」3名、「怖かった」3名、その他、「勇気がなかった」「いじめられっ子のことが嫌いだっただから」などの回答がみられた。

・いじめをとめた理由

いじめに介入し、いじめを止めようとしたと回答した5名は、その理由として、「見ていられなかった」「仲良くしたかった」と積極的な理由を回答したものが2名、「何となく」など明確な理由が述べられなかったものが3名だった。

・いじめ終結の理由（きっかけ）

いじめ終結の理由としては、「転校、クラス替え」との回答が14件、「いじめっ子が変わった」8件、「いじめっ子が変わった」7件、「周りが変わった」11件、「誰かが介入した」10件、「その他」18件であった（複数回答）。

### 3 基本的対人態度といじめ体験との関連

いじめ関連体験別のT（依存・親和）A（敵対・指導）I（孤立・独創）の基本的対人態度得点は、表1に示されている。各得点が、いじめ体験の違いによって差があるかどうか分析した結果、被害（いじめられた）体験者のA（攻撃）得点が、他のいじめ体験者のA得点よりも低い傾向があった（ $F(4,47)=2.14, p<.1$ ）。

次に、いじめ関連体験に何らかの肯定的側面のある者を選び出した。具体的には、積極的にいじめを解決しようとしたとする回答と、傍観者の中で自分の行動をふり返り反省心の見られるものである。これらの回答者の対人態度得点の平均と、その他の回答者の得点の平均は、表2に示されている。

表1 いじめ体験別の対人態度得点（SD）

	T	A	I	g/p	N
加 害 (いじめた)	21.00(5.22)	19.67(3.72)	17.00(7.87)	1.07(0.22)	6
被 害 (いじめられた)	20.56(4.78)	15.39(4.88)	18.39(4.88)	1.33(0.67)	18
介 入 (いじめをとめた)	22.00(6.54)	16.79(5.16)	18.51(5.92)	1.09(0.27)	14
傍 観 (見ていた)	20.00(6.93)	17.43(4.47)	18.36(6.07)	1.20(0.41)	5
体験なし	21.43(4.65)	20.71(4.50)	19.14(2.79)	1.09(0.12)	7
平均	20.51(5.15)	17.58(4.69)	18.47(5.09)	1.23(0.47)	

表2 いじめ体験での肯定的側面の有無と対人態度得点（SD）

	T	A	I	p/g	n
肯定的側面あり	22.23(4.70)	16.46(4.50)	15.69(4.13)	1.67(0.63)	13
肯定的側面なし	19.91(5.49)	17.20(4.72)	19.33(5.63)	1.07(0.30)	37

t検定の結果、いじめ関連体験をしてもそこに肯定的側面のある者のA得点ならびにI得点は、その他の回答者よりも低い傾向にあった（それぞれ $t=1.87$ ,  $t=1.63$ , いずれも $df=48$ ,  $p<.1$ ）。また、対人態度全般の望ましさを示すp/g得点は、肯定的側面のある回答者の方が、その他の回答者よりも有意に高かった（ $t(48)=3.85$ ,  $p<.01$ ）。

被害体験（ $n=18$ ）、傍観体験（ $n=14$ ）以外のいじめ体験のデータは、少なかったために、事例的に見ることとする。加害体験者（ $n=6$ ）の基本的対人得点の平均は、とりたてて特徴的な部分はない。しかし個々のデータを見ると、T（依存・親和）得点が27点と高得点の回答者が1名、I（孤立・独創）得点が32点と極端に高かった者が1名、逆にこの得点が9点と低かったものが、1名であった。

介入体験の被検査者の対人態度得点には、特に特徴的なものは見られなかったが、この中でも、正義感や友情など積極的な理由でいじめに介入し、被害者を守ろうとした2ケースは、それぞれg/p得点が、1.5と1.4と、望ましい対人行動得点を取っていた。なお、被害体験者は、A（敵対・指導）の平均得点が低い傾向にあったわけだが、特に低い9点と6点が、各1名ずついた。

## 考 察

本研究は、大学生を被検査者とし、かつてのいじめ体験と現在の対人態度との関連を調べたものである。まず、回答者全体の86%が、身近にいじめがあり、被害者、加害者、傍観者のいずれかのいじめ体験をしていた。

深谷（1996）が大学生377名を対象に行った調査によると、大学生の72%が、小校時代に被害、加害、傍観を含めたいじめ体験があったと報告されている。本研究の場合は、いじめのあった時期を特定していないためにやや割合が大きくなったが、一般に8割前後の学生が、子供時代にいじめに関連する体験をしていると考えられるだろう。

いじめに関する被害、加害、傍観の体験別に、対人態度を比較した結果、全体的にはいじめ体験別ごとの対人態度特徴の大きな違いは、見られなかった。これは、様々ないじめ体験の主要な原因が、性格や対人行動の違いではないことを示すだろう。現代のいじめは、以前とことなり、特定の乱暴ないじめっ子や、いじめられっ子が存在しているのではないと言えるだろう。宮原（1983）や竹村・高木（1988）も、いじめは特定の特徴を持つ子どもに向けられるというよりも、集団からの逸脱者に向けられると報告している。いじめ—いじめられ関係は、流動的で、どのようないじめ体験をするかは、偶発的なものだと考えられる。

ただし、唯一見られた違いとして、被害体験をしていた者のA（反発・指導）が低いことがわかった。深谷（1996）は、「いじめられっ子」の弱点や性格的特徴として自由記述されたデータをもとに因子分析を行い、第1因子として、いじめられても反発力を持たない弱い子供たちとして「弱者因子」を抽出している。

本研究の結果も、同様に、いじめを受けた体験者の攻撃的態度の弱さを示すものである。現代の学校では、どの子どももいじめの対象となりうる。いじめの対象となる子どもは、様々な些細な理由でいじめられ、特定の「いじめられっ子」のパターンがあるとは考えにくい。しかし、いじめという攻撃を受けたときに、それに反発することの少ない子どもが、いじめの対象となりやすく、また被害を受けた者の印象に深く残ってしまうようないじめられ体験をしてしまうと考えられる。

また、深谷の研究は、いじめを受けている当時の子供の特性を調べたものだが、本研究では、

その後成人した後においても、反発力、攻撃力の弱さが持続していることを示すものである。

次に、いじめ関連体験をしても、そこに肯定的側面を見いだした者たちは、AとIが低い傾向にあることが示された。さらに、g/p（対人態度の望ましき）が、有意に高いことが示された。つまり、いじめ関連の体験をしても、そこに肯定的側面を見いだした者たちの対人態度は、より協調的で、良好だと言えるだろう。

今現在いじめが行われている場合には、もちろん危機介入的なアプローチが必要だろう。いじめに関する研究としても、そのいじめのメカニズム、防止策を研究することの重要性はいうまでもない。しかし同時に、いじめ体験がその後の人格成長に大きな影響を及ぼしていることが考えられる。本研究の結果からも、「いじめられっ子」の反発力の弱さだけではなく、現在大学生になった、かつての「いじめられっ子」においても同様の対人特性が存在することが確かめられた。

現在、様々な立場からいじめをなくすための努力がされている。しかしながら、現実としては、いじめ関連体験をまったくなしに成長していくことは、大変困難だろう。だとしたら、そのいじめが深刻化しない努力と同時に、長期的な悪影響を及ぼさないような努力が必要だろう。本研究においても、かつてのいじめ体験の中に肯定的側面を見いだしている者たちの対人態度は良好であることが示されている。

いじめ防止の重要性は言うまでもないが、本研究は、いじめをどのように終息させるかが重要であることを示している。可能であるならば、クラス替え、卒業などによる自然消滅ではなく、積極的ないじめの解決を行ったほうが、望ましい影響を残すと言えるだろう。

今回の調査に対して、多くの大学生達が印象的ないじめの存在を語った。また一般的にも大学生の自分史にいじめ関連の記述が見られる。このように、子ども時代のいじめが、成人後にも様々な影響を与えていることを考えると、いじめに対する精神的ケアは、実際がいじめが行われている時だけではなく、長期にわたって必要な場合があると言えよう。

本研究は、データ数が少ないこと、いじめ関連体験の調査項目が不十分であることなど、研究として不備な点が多々ある。たとえば、本研究では「傍観者」としてまとめたいじめ体験は、森田ら（1986）が指摘するように、「はやしたり面白がったりする子」（観衆）と、「見て見ぬふりをする」（傍観者）とに分類することが必要だったろう。

だが、多くの不十分な点がある中で、いじめを一般的対人態度との関連で考察できたこと、および、いじめの長期的影響についての研究の可能性を示した点においては、意義のあるものと言えるだろう。今後さらにデータ数を増やし、統計的な調査を進めると同時に、いじめの長期的影響に関しては、事例研究的なアプローチも必要であろう。今回の調査においても、特徴的ないじめ体験をしてきた被検査者、また特徴的な対人態度得点を取った被検査者に対して、面接調査を行い、事例研究的なアプローチがなされていけば、統計的な研究では隠れていた知見を見いだすことができたであろう。

いじめに関する研究は、一方で、教育学、社会学的観点から、教育問題、社会問題として語られ、また一方で、臨床心理学的観点から、いじめに関する人々の深層心理学的な問題が語られている。そして、本研究で試みたような社会心理学的な研究は、いじめの問題を、人間関係、対人区お堂の問題として捕らえようとしている。いじめ問題の根は深く、今後とも多くの観点からのアプローチが必要だろう。

## 引用文献

- 深谷和子 1996 「いじめ世界」の子どもたち 金子書房
- 笠井孝久 1988 小学生・中学生の「いじめ」認識 教育心理学研究, 46, 77-85
- 香取早苗 1998 いじめの影響 松原達哉 編著 ふつろの子がふるう暴力 教育開発研究所
- 松尾恒子 1996 遊び心なきギャング・エイジ現象：情緒障害児といじめへの一視角 心の科学, 70, 46-49 日本評論社
- 光竹充雄 1997 いじめによる不安障害を乗り越えて：PTSDからの理解と支援 日本カウンセリング学会 第30回大会 発表論文集 194-195
- 森田洋司・清水賢二 1996「いじめ：教室の病」 金子書房
- 宮原広司 1983 いじめ構造と実践の課題 生活指導 319, 5-8
- 能重真作 1985 いじめはなくせる あけび書房
- 西田直喜 1964 (川瀬正裕・松本真理子 編 1993 自分探しの心理学 ナカニシヤ出版)
- オールエーズ, D 角山剛ら訳 1995 いじめはこうすれば防げる 川島書店 (Olweus, D. 1993 Bullying at school. Oxford, Blackwell.)
- 竹村和久・高木修 いじめ現象に関する心理的要因：逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾性 教育心理学研究, 36, 57-62
- 滝 充 1996 実証主義の立場から：「いじめ問題」の背景と対応を考える 日本教育社会学会 第48回大会課題研究部会「いじめの社会学」報告資料
- 油布佐和子 1996 いじめ問題に関する一考察 福岡教育大学研究紀要 第45号 第4分冊